

茨城県南地区で血液・髄液から分離した嫌気性グラム陰性桿菌の薬剤感受性

¹筑波大学附属病院 感染症科

○小金丸 博¹、人見 重美¹

【目的】嫌気性グラム陰性桿菌 (AnGNB) は、ヒトの口腔や腸管に常在し、腹腔感染症などを起こすことがある。AnGNB による感染症では、 β ラクタマーゼ産生株が多いこと、クリンダマイシンへの耐性化が進んでいることなど、治療薬の選択に注意すべき点が多い。このため、重症感染症を起こした AnGNB の薬剤感受性を調査した。

【方法】茨城県南地区の 8 病院で、2001 年 7 月から 2012 年 2 月までに、血液・髄液から分離した嫌気性グラム陰性桿菌 133 株の薬剤感受性を測定した。菌名は 16SrRNA 遺伝子の塩基配列から同定した。薬剤感受性は、微量液体希釈法 (*B. fragilis* group) および Etest (その他) で測定した。

【結果】検討した 133 株の内訳は、*B. fragilis* group が 83 株 (うち *B. fragilis* が 56 株、*B. thetaiotaomicron* が 17 株)、その他の (*Para*) *Bacteroides* 属が 10 株、*Fusobacterium* 属が 21 株、*Prevotella* 属が 5 株、その他の菌種が 14 株 (*Clostridium* 属 8 株、*Alistipes* 属 2 株、*Desulfovibrio* 属 2 株、*Butyrivimonas* 属 1 株、*Dialister* 属 1 株) だった。*B. fragilis* group の感性率は、ABPC/SBT: 99%、PIPC/TAZ: 100%、CMZ: 88%、IMP: 99%、CLDM: 69%、MFLX: 70%、METRO: 100% だった。IMP 耐性株は、*cfiA* 遺伝子陽性だった。2008 年以前と 2009 年以降で比べた時、感性率が有意に低下している薬剤はなかった。*Fusobacterium* 属の感性率は、PC-G: 95% (β ラクタマーゼ産生株 1 株以外)、CLDM: 100%、METRO: 100% だった。

【まとめ】今回の調査の範囲では、AnGNB の薬剤感受性に大きな経時的変化はなかった。しかし、*B. fragilis* group では 10–40% が CMZ、CLDM、MFLX 耐性株であり、実際の診療に当たっては、分離株の薬剤感受性を確認する必要がある。

歯性感染症主要起炎菌検出率および各種抗菌薬に対する感受性の経年推移について

¹東海大学 医学部 外科学系口腔外科、²三菱化学メディエンス微生物検査グループ、³東邦大学看護学部感染制御学講座

○金子 明寛¹、青木 隆幸¹、鈴木 崇嗣¹、傳田 祐也¹、小山 英明²、松崎 薫²、長谷川 美幸²、池田 文昭²、金山 明子³、小林 寅喆³

【目的】我々は 1998 年より歯性感染症主要起炎菌の分離頻度および各種抗菌薬に対する感受性を経年的に調査し報告している。今回、2010～11 年に実施した調査成績を報告する。

【方法】2010～11 年に複数の医療機関を受診した急性歯性感染症患者より採取した閉鎖膿瘍 665 検体を対象に起炎菌の分離同定を行った。各種抗菌薬に対する感受性は CLSI に準拠した微量液体希釈法で測定した。

【成績および考察】歯性感染症患者の閉鎖膿瘍からの主要検出菌の分離頻度は *Streptococcus* 属 521 株 (78%)、*Peptostreptococcus* 属 257 株 (39%) および *Prevotella* 属 241 株 (36%) であり、これまでの調査成績と大差なかった。主要検出菌別に各種抗菌薬の MIC を測定した結果、*Prevotella* 属に対する ABPC および CTRX の MIC₉₀ は各々 128 および 64 μ g/mL と高かったが、SBT/ABPC の MIC₉₀ は 4 μ g/mL と比較的良好な抗菌活性を示した。また、*Prevotella* 属に対する AZM および CLDM の MIC₉₀ も各々 >16 および >128 μ g/mL と高かった。*Peptostreptococcus* 属に対しては AZM の MIC₉₀ が >16 μ g/mL と高かった以外は今回測定した抗菌薬は比較的良好な抗菌活性を示した。*Streptococcus* 属では *S. anginosus* group および *viridans Streptococcus* に対する LVFX の MIC₉₀ が各々 1 および 16 μ g/mL、CLDM の MIC₉₀ が各々 16 および ≤ 0.06 μ g/mL であり両菌群で差が認められたが、その他の抗菌活性プロファイルは類似していた。また、過去に報告した抗菌薬感受性成績と比較して主要 3 菌属の 2010～11 年分離株において明らかな耐性化は認められなかった。